

Title	問いと答え：ベンヤミンと前期ヴィトゲンシュタインにおける自然科学と哲学の相関について
Sub Title	Fragen und Antworten : Zur Anschauung der Naturwissenschaften bei Benjamin und dem jungen Wittgenstein
Author	桑川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.272(101)- 280(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0280

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

問いと答え

——ベンヤミンと前期ヴァイトゲンシュタイン
における自然科学と哲学の相関について——

籾川 麻里生

1. はじめに

我々はしじゅう考える。考えるということは、自らの内面において何らかの問いを行なうことのように思える。だが問いとは、答えを求める言語の活動だろうか？ 答えの出ない問いというものもある。しばしば人はそのような問いを慎重に避けねばならない。たとえば、答えが出るように問いを形成することこそ、知（Wissenschaft）としての科学において最初になければならないことであろう。しかし一方で、答えの出るはずのないことがらについても、我々はしばしば問わずにはいられない。しかも、そのような答えの出ない問いこそ、人間にとって真に問うに値する問いであることみなされることさえあるのだ。だが、そもそも「問い」、そしてそれに対して与えられるはずの「答え」とはなんだろうか。どのような時に我々はひとつの問いに「解答が与えられた」とみなすのであろうか。また、答えの出ないはずの問いは、いつどのようにして克服されるのであろうか。

本論文では、ヴァルター・ベンヤミンとルートヴィヒ・ヴァイトゲンシュタインの言語哲学における自然科学の位置付けを比較検討することを通して、「問い」と「答え」の関係について考察する。言いかえれば、「答えのある問い」と「答えのありえない問い」を、彼らが言語哲学的にどのような位置付けているのかを追っていくことで、我々に可能な「問い」、また我々が問うべき「問い」とはどのようなものであるのかを考えてみたいと思う。

2. 「語りうるもの」としての自然科学

前期と呼ばれる時期のヴィトゲンシュタインにとって、「自然科学」とは学問のひとつの分野というよりは、そもそも人間に可能もしくは許される言語活動の総称であった。

哲学の正しい方法というものがあるとすれば、以下のようなものとなるろう：語りうるもの以外にはなにも語らぬこと。つまり、自然科学の命題以外には何も語らぬこと。つまり、哲学と何の関わりも持たぬことしか語らぬこと。（『論理哲学論考』；以下『論考』6.53(1)）

ヴィトゲンシュタインにとって本来可能な言葉とは、「像 (Bild)」としてある事実を反映している命題であった。この場合の「像」という概念は、ある命題において、その命題を構成する諸部分の意味の結合によって意味が発生するのではなく、その命題の全体があたかも写真か写実画のようにある事実を写像している、という意味において用いられている。したがって、それぞれの絵の具の色が画像とモデルとの間に写像が性質する根拠とはならないように、文の諸部分が事実の諸要素に対応することがわかるのは、あくまでも文全体の意味が明らかになった後（人間は肌色だとは限らない）なのである。しかも、像（命題）とモデル（事実）は何らかのフォルム（命題の場合は論理の形式）を共有するのであるが、それがどのようなものなのかは、もはや「語る」(sagen) ことはできない。像とモデルの間で共有されるフォルムは、この2者を見比べるとき、おのずと「示 (zeigen) され」ているはずなのである。

前期ヴィトゲンシュタインにおいては、そのような写像としての文、命題だけが、有意味な、すなわち可能な言葉とみなされていた。したがって、「問い」に対する「答え」も、当然そういったものでなければならず、写像としての命題で回答できないような問いは、そもそも問いではないのであった。

言葉にできない答えに対しては、問いを言葉にすることもできない。

謎は存在しないのだ。そもそも、問いを立てることが可能ならば、その問いに答えることも可能である。(『論考』6.5(2))

言葉にできることとは、すでに見たように、前期ヴィトゲンシュタインの場合自然科学の命題にほかならない。ここで注目すべきは、彼にとって自然科学の命題はすべて「偶然によって起こる事態」を記述したものに過ぎないという点だ。前期ヴィトゲンシュタインにおいて、有意味な命題は現実を写した像でなければならなかったが、その写像は要素命題による真理関数として構成されるのであった。そしてこの要素命題とは、互いにその成立・非成立が独立である最小単位の命題であるとされた。すでに述べた通り、命題は全体として把握されてはじめて、ある事実の像として見なされるのであり、文の諸部分は互いになんらの因果関係も持たないのである。もしも、文のある部分に対応する事態の成立・不成立が、それ以外の要素に依存する場合には、その部分はより論理的に小さな構造へと分解され、最終的に互いに独立な諸要素すなわち要素命題へと分解されねばならないとされた。

前期ヴィトゲンシュタインにとり、ある種の必然性を持ちうるものがあるとすればそれは「論理」にほかならなかった。言語の使用に示される論理だけが、諸要素を必然性のもとに結合することができた。つまり、必然性は言語もしくは論理の側にあるのであって、現象が法則にしたがっているように見えるとしても、それはあくまでも偶然にすぎないのである。それゆえ、科学の成果として見出されたものであるかに見える自然法則もまた、もともと言語の論理の側に属していたものであり、法則をもって自然現象を説明することは厳密には不可能なのである。

現代の世界観全体の根底には、いわゆる自然法則は自然現象の説明である、という錯覚がある。(『論考』6.371(3))

また、ヴィトゲンシュタインは、自然科学はある白黒の画像の上にかぶせられた網のようなものであり、その網の目を細かくしていけば、それぞれの目について黒か白かを言うことで、近似的に現象の正確な記述へと近

づいてゆけると考えた。ただし、この「網」すなわち科学の体系は任意のものであり、自然現象なり他の諸要素に対応して必然的に要請されるものではない。

この統一的な形式は任意のものである。場合によっては、[正方形よりも]三角形の目の網を使ったほうが、記述が単純になるかもしれない。[……]さまざまな網には、世界を記述する多種多様な体系が対応している。(『論考』6.341(4))

この見解が当を得ていることは、光を波ととらえるか量ととらえるかで物理世界の記述方法が変わってくることを思い起こせば用意に理解できるだろう。すなわち、自然科学がどのような体系を作ろうとも、その体系の構造自体は自然現象とそのものとなんの関わりもないのである。

3. 自律した「無限」としての自然科学

若きベンヤミンは、自らの哲学に理論的な基礎づけを与えようとしていた1910年代後半、多くの哲学的断章を残しているが、その中には自然科学の哲学的位置付けをテーマにしたものも少なくない。『事象の科学的記述には当該の事象の説明が前提されていることの証明の試み』と題された断片で、ベンヤミンは前期ヴィトゲンシュタインと重なる点の多い議論を展開している。この断片の長い題名の意図するところは、ある事象の科学的記述、すなわち実験としての事象の記述には、その事象にあらわれているはずの自然法則を説明することがあらかじめ前提とされている、というものである。つまり、実験を記述することによってはじめて確定されるものであるかのように思われる自然法則は、じつは実験の前にすでに確定されているというものである。

したがって、当の自然法則はまず実験の前に確定されておらねばならず、実験は、その自然法則の土台になっている仮説が、実験の対象となっている我々の偶然の現実に当てはまるかどうかを調べるに過ぎな

い⁽⁵⁾。

ヴィトゲンシュタイン同様、ベンヤミンも自然現象自体には必然性を認めない。法則はそれ自体、自律したものであり、その内部においては必然性が認められる。しかし、現象の方に必然性を見出す理由は存在しないのである。

我々は、必然性というものを、数学の領域においてしか絶対的に想定できないのだから、これ〔現象の偶然性〕は当然のことである。我々は現象の必然性（数学性）を直接には想定できないのだから、その限りで経験は偶然的なものということになる⁽⁶⁾。

ベンヤミンによれば、我々の世界における諸現象がすべて偶然的である以上、実験においてある物理法則の妥当性が示されたとしても、それをもってその法則の必然性が証明されたことにはならない。むしろ、原理的にはあらゆる仮説は頭の中で考えるだけで見出せるのであり、自然科学の実験は自然科学にとってかならずしも必要なものではないとさえ言えるのだ（さらに言えば、ベンヤミンにおいて自然現象を記述することは、時間的で偶然的な「現象」を、無時間的で必然的な「言語」の中に「救済」というメシア的な行為へとつながっていくのだが、このことについて論じるには別の機会を待たねばならない）。

また別の断章の中では、ベンヤミンは自然科学をコーエンら新カント学派の哲学者達が用いた概念によって、「無限の課題（die unendliche Aufgabe）」と呼んでいる。ここで問題になっているのは、全体もしくは統一としての科学である。科学の「統一」は、近代自然科学者たち、そして哲学者たちの見果てぬ夢であった。自然科学が発展してゆき、しかもそれらの成果を理論的に統一できれば、あらゆる自然界の現象を統一的に説明できるのではないかという夢は、自然科学が幾多の専門科学として分化しはじめた18世紀後半から、知識を求める人間たちの半ば当然の要求として存在し続けてきた。

しかし、すでに述べたように、自然科学は任意の体系であり、その必然

性の根拠は直接には自然界にはない。したがって、いかに科学が発達し、また相互に関連付けられようとも、それが統一された知の体系として完成することもない。その意味で、科学は「無限の課題」なのである。

無限の課題は（問いとして）与えられているわけではない。世界および存在についての可能な無限の問いが、科学を必要なものとしているわけではない。[……] 科学の統一は問いをたてて答えを得ることができるような性質のものではない⁽⁷⁾。

ヴィトゲンシュタインにおいては、自然科学とは「語ることが可能なこと」のすべてを指す概念であった。語ることが可能なことについては、問うこともできる。ベンヤミンもまた、自然科学を同じようにとらえている。

科学とは、それ自体の課題によって余すところなく処理された解決である。科学の課題とは、解決可能性にほかならない。科学に課せられた課題は、つねに解決そのものを内包している課題である⁽⁸⁾。

つまり、ベンヤミンが自然科学を「無限の課題」と呼ぶのは、自然科学において「問い」が無限に与えられているから、もしくは与えられうるからではない。そもそも、厳密に言えば、自然科学に課題を「与える」ことはできない。すでに述べたように、自然現象が自然科学を決定するのではなく、まず自然科学が前提として成立した後で、それをを用いて自然現象が描写されるのであるからだ。「解決可能性」としての科学は、問いの数において無限なのではなく、その自律した形式において無限なのである。

4. 結論：「謎」は残されているか

以上で、前期ヴィトゲンシュタイン、ベンヤミンともに、自然科学を「解答可能な問い」の全体としてとらえ、しかもそこに絶対的な自律性と任意性を見ていたことを述べてきた。彼らにとって、解決可能な問いとしての自然科学は、科学の統一、世界の全体、といった形而上学的なことからについて答えを与えることは（そもそも問いが形成できない以上）でき

なかったのである。そして、問いに対する答えのような形では解決しえない「人生の諸問題」については、前期ヴィトゲンシュタインは、「沈黙」することで、逆説的に答えを「示そう」とした。

哲学は、語りうることを明晰に表現することによって、語りえぬことを示唆するであろう。(『論考』4.115(8))

ヴィトゲンシュタインは、答えの出ない問いの存在、すなわち「謎」も認めなかった。冒頭の引用で見たように、「謎 (Rätsel) は存在しない」と言いきった。だが、ベンヤミンにも謎について言及した断章『謎と秘密』があるが、興味深いことにヴィトゲンシュタインと微妙に重なり、微妙に食い違う。

謎が成立するのは、なんら奇妙な点も持たず、そもそもなんの変哲もないように見えるものや出来事を、シンボリックな意味付けの領域へと近づけようとする志向が強く働くときである。シンボリックの核心には秘密があり、人はこれらのものや出来事からなにか「秘密に満ちた」面を取り出そうと試みるのである。しかし、このような試みは一狭い意味での「世俗的な」対象に対しては一けして目標に達することができない。[……]客観的に存在しているのは、秘密を目指そうとする志向、つまり、物や出来事にひそむ解答不能のものを目指す志向だけであって、この志向は結局は期待はずれに終わらざるをえないのだ⁽¹⁰⁾。

だが、ベンヤミンは「謎」への志向を単なる「期待はずれ」だけには終わらせない。上の文章に続けて、彼はこの志向を最終的には正当なものとして認める。

というのも、存在するものはすべて、他でもない言葉として、言葉の持つシンボリックな力によって、自ら秘密に参加できるからである。[……]すなわち、言葉はそれ自体すでに「謎としての言葉」なのであり、言葉のなかには、言葉において伝達されるものの彼方に根拠をもつシンボリックな核、すなわち非・伝達可能性としてのシンボルが宿っているからである⁽¹³⁾。

つまり、ベンヤミンは、語りうるものとしての言葉、意味内容を伝達する装置としての言葉には、謎あるいは秘密に達する契機を認めなかったが、それでもなお言葉には「シンボル」すなわち単なる伝達を超えた表現力を持つ象徴としての言葉には伝達内容を超えた次元に達する可能性を見ていた。

ベンヤミンのこの言語観は、前期ヴィトゲンシュタインにおける「示す」という概念から、さらには後期における「言語ゲーム」の発想ともつながってくるものである。後期ヴィトゲンシュタインは、言葉の使用のさまざまな具体例を、統一的な説明を加えたり通約的な意味を与えたりすることなく、ただ同一の視界のもとに展望 (übersehen) しようとする。そしてこれがヴィトゲンシュタインの新しい「沈黙」の形であった。そこではもはや意味が説明されること、すなわち語られることはないが、すべての言葉はそれぞれの使用の中でシンボルとして語りえぬ意味に満たされる。そして、それらは「言語ゲーム」の一手一手として、単なる伝達の手段ではなく、力の行使の世界を動き始めるのである。

だが、この言語のシンボリズムと「言語ゲーム」的発想との関係を論じることが、もはやこの小論の果たすところではない。ここではとりあえずの結語として、ヴィトゲンシュタイン、ベンヤミンともに、「語りうる」言語の領域に厳格に限界を設けた上で、しかしそれ以上の言語活動を断念するのではなく、「示す」もしくは「象徴する」という言語の別の働きを手がかりとして、いよいよ「哲学の問題」の最奥へと進んでいったことを指摘しておきたい。

Anmerkungen

- (1) Wittgenstein : Werkaufgabe. Frankfurt a. M. 1987. [=WA.] I. S. 85
- (2) Ebd. S. 84
- (3) Ebd. S. 78
- (4) Ebd. S. 78
- (5) Walter Benjamin : Gesammelte Schriften. Frankfurt a. M. 1991.

[=GS.] VI. S. 40

- (6) Ebd.
- (7) Ebd.
- (8) Ebd. S. 41
- (9) WA. I. S. 33
- (10) GS. VI. S. 17
- (11) Ebd.